

シラチャ校だより

泰日協会学校
シラチャ校

2012, 1, 31



小学校社会科副読本「わたしたちのタイ・シラチャ」製作にあたって

この度、社会科副読本「わたしたちのタイ・シラチャ」がようやく完成しました。小学校3・4年生の社会科では、学校や家のまわりなど地域社会について学習します。地域に住む人々の生活のようす、自然環境や発展している産業、それらの今と昔の違いや変化のようすなどが学習対象です。学習を通じて、地域の一員としての自覚や、自分の住む場所への誇りと愛情を育むことを目的としています。また、調べ学習や調査活動、その結果を発表する活動などから、資料を的確に読み取る力や表現する力を養うことも目的の一つです。

学校周辺、シラチャやチョンブリが本校にとっての地域社会となるのですが、開校当時はそれに詳しい教員がおらず、授業づくりにとても苦心しました。保護者のみなさまや日本人会などからうかがったお話しをもとに教材研究を進めたものです。長い歴史のあるバンコク日本人学校には、学習の手引きとなる「私たちのタイ・バンコク」という副読本があり、当初はシラチャ校もそれを使用させていただいていました。そのような中で、よりシラチャ校の実態に適したものをなんとかつくれないかという思いで動き始めたのが開校一年目でした。

昨年度は、教員の間で「副読本製作編集委員会」を立ち上げ、教員自身が実際の生活の中から経験したことや聞いた話しをもとにして、地域社会の情報を収集しました。できて間もない学校であり、教員自身もシラチャに来て日が浅いため、とにかくできるだけたくさんの情報を集めることから始めました。

今年度に入り、集めた情報を持ち寄り、教育課程に合わせてどのような構成にするのか、わかりやすい冊子にするためにどのような資料や写真が必要か、その取材はどうするのかなど、製作に向けてより具体的な動きとなりました。そして、製本業者を決定し内容や構成を確定させ、休日や夏季休業中を利用して、編集委員が分担して取材活動を行いました。地元の関係機関へ行く場合は、慣れないタイ語での取材にとても苦労しましたが、日本人会運営委員会やニオンディレクターに協力いただき、よい取材を行うことができました。前記のバンコク日本人学校の副読本を参考にさせていただいたこと、海外子女教育振興財団から資金援助をいただいたことも完成への大きな原動力となりました。また、表紙のデザインは小学部3年生が担当しました。



編集委員会のようす

こうして2012年1月、「わたしたちのタイ・シラチャ」第1版発行となりました。小学校3・4年生向けの社会科副読本ですが、第1版を記念して全校児童生徒に配布させていただきました。プロの業者の製本のため立派な仕上がりですが、中を見ていただければ随所に手作り感があふれていることがおわかりいただけると思います。この副読本を手にも、子どもたちが楽しく学習し、力を伸ばしていくことを期待しています。また、さらに発展しつつあるシラチャの街に合わせて、2版、3版とよりよい副読本になっていくことを編集委員一同願っています。

製作にあたり多大なるご協力をいただきましたみなさま、関係機関の方々に、この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。
(文責 社会科担当 小川 誠)

姿 勢

お正月で、日本へ帰った時、以前からの知り合いで、とても若々しく見える人に出会って、しばし歓談の時を持った。

その人は、地方都市の文化協会会長をすることになった人だが、年齢を聞いてみてビックリ。もう80歳に近いのだという。見た目には、私よりちょっと上の65歳ぐらいしか見えない。

それで、秘訣を聞いてみたら、「まあ、酒もタバコもやらないからね。それに若いときに、ちょっと日本舞踊を修業したことがあるので、姿勢には気をつけている。歩くときでも立つときでも手は後ろに組んで、背筋を伸ばすようにしている。」とおっしゃった。

※

「なるほど、参考になるなあ。」というのがその時の私の感想。

思えば、戦後から現代にかけて、どんどんすたれて行っていることの中に、この「良い姿勢を保つ意識」も挙げられるのではないかと私は思う。

戦後まもなくは、つまり私たちの小中学生時代だけれど、この姿勢のことについて、それなりに指導する先生は結構いた。

あの先生は、姿勢だけはうるさかった。ちゃんとしていないいつも背中を叩かれたなどと、自分の小学校時代を振り返る声を身近に聞いたこともある。

でも、最近の日本人の様子と来たらどうだろう、大人は子供にそのことはうるさいわなくなったし、自主性尊重と称して、必要な訓練を怠っている大人が多くなった。いや、むしろ最近では、そういう意識が大人

の中になくなってきているというのが正しいところかも知れない。

その結果、どういうことが起きているか。

極端な例は、あのギャングロお姉ちゃんに代表される女の子の地べた座りである。また、地方都市では、コンビニの前にたむろする若者は、時間があると良く地べたに変な格好で座っている。

この現象を戦前に予想できた人はほとんどないに違いない。それだけ、世の中と若者の心の中に変化が起きているということだ。

※

アメリカの学校ではそうなのだが、インター校でも、姿勢のことを指導されることはないと聞く。先生自身も机の上に腰掛けて授業をしたりして、姿勢のことについてはあまり気にかけていないようだ。

しかし、その自由な風習を持っているアメリカに長く住んで、久しぶりに日本へ帰ってきた人に聞くと、空港で床に妙な格好で座っている女の子を見ると、大変ビックリするそうだ。

「日本の若者のビヘイビア(姿勢・態度)は、一体、どうなっちゃっているのかしら」と。

何でも、あちらでは学校で指導はされないが、皆自分自身で姿勢に注意しているらしい。多くの人は街を歩く時も、ショウウィンドーで、自分の立ち姿をいつもチェックしているのだという。

※

姿勢や服装は、その人の心の状態を映している、と多くの日本人は考えている。

だから、日本の学校では変わっ

た服装の子供を見ると心配するし、そうした服装をさせまいとうるさく指導する。

服装はおかしくても、心はそうでもないんだよ、と言う人もいるが、多くの方はそう考えていない。それは少ない例外であって、それを強調するのはかえっておかしいと…。

姿勢が先なのか、心の状態が先なのか…。いずれにしても、その双方は密接な関係を持っているということには、疑う余地がない。

私自身、良い姿勢は私に良い結果をもたらすだろうと思う。良い姿勢を心がけるという形から入っていくやり方で、良い心の状態や良い身体の状態を保つ効果はあると感じている。

今年の正月は、そのことを学んだ訳だ。

※

我が日本人学校の子供達は、インター校、現地校とは学ぶ場を異にしている。そして、その場所、場所で一番違っているのは、指導する先生や大人の物の感じ方、考え方だ。

しかし、どうだろう。学ぶ場や、生活の場が異なっただとしても良い姿勢を心がけることの大切さは世界共通で変わらないのではないのではないか、と私は思う。

一方は、誰にも指導されないけれど、自ら考え自ら鏡を見て心がける。一方は、学校の先生や親にうるさめに注意されながらという違いはあるのだろうかけれど…。

良い姿勢の価値は世界共通。つまりはこれも、グローバルスタンダードのひとつということ、と思う。

(校長)